

本書：ナポレオン四代～二人のフランス皇帝と悲運の後継者たち～

出版：中公新書

皇朝の創設者といわれているナポレオン1世は、1769年にコルシカで生まれ、留学などを経験し勉学に励んでいたが、成績はそれほど高くはなかった。ナポレオンは軍の学校いりながら、フランスが祖国コルシカを蹂躪したことに危機感を持ち、戦おうとしていた。革命派であったナポレオンが台頭したが逮捕をきっかけに不遇の時代に突入していった。彼は政治に従事し、第一統領として独裁的な権力を握っていた。そしてフランス革命が終息すると同時に新たな歴史の局面が始まる。ナポレオンは皇帝になってからも精力的に政務を執り行い、代表的な政策として保護関税によって経済的な障壁をもうける大陸封鎖を行った。また政治的・軍事的な面では露・普通合軍を破り、条約を結んでワルシャワ公園を作った。こうした戦勝の結果、ナポレオンはロシアをのぞくほとんどのヨーロッパを征服するに至った。しかしフランスが軍事力を背景に大陸支配を続けるうち、これに対する反感が徐々に強まっていき、ドイツのフィヒテに代表されるように各国・地域のナショナリズムが芽生えていった。次第に彼の支持率は低下し、退位に追い込まれていった。退位後、エルバ島で主権・皇帝称号が認められ、フランス皇帝からエルバ皇帝へと変わった。その後エルバ島を脱出し、再びフランス皇帝へと復位したナポレオンは再びヨーロッパ列強との対決を余儀なくされていたが、もはや往時の勢いはなく、最後の戦線の敗北をうけ、帝国議会では皇帝退位が推進されていた。後退したナポレオンは島に配流され静かに息を引き取った。コルシカ独立を夢見た少年時代から皇帝へと上り詰めたナポレオンは、一生涯においてナショナリズムを高揚させる一方、農民層を中心に根強いナポレオン崇拜が残存されていった。

ナポレオンの死は国内に瞬く間に広がり、現行の体制に対する不満は、えてしてナポレオン時代を理想化するという方向に向いていった。また、理想化が加速するにつれ、虚像さえも作られ流布していった。間違いなく近代フランス史に不可欠のページを加えるナポレオン伝説という現象になった。ナポレオン2世は、7月革命の影響でイタリア・ポーランドなどでは独立の気運が高まり、その旗頭として人気が高まっていた。その一方イギリスやロシアはナポレオンの可能性を示唆し嫌っていた。ナポレオンの息子であるライヒシュタット公は、成長するにつれて地震がフランス人であることを自覚していった。その後も父の後を追うように軍のキャリアに進みたいという考えが台頭していた。同時に公は体調が悪化し生涯を終えた。公の死後、皇位継承権をめぐる一族内で相続の争いが起きていた。ルイ・ナポレオンに皇位継承権が移りバナパルト家の命運は、第二世代の当主に託されることになった。ナポレオン2世としてのライヒシュタット公は、父帝1世の没落に連座する形でフランスに追われ、ドイツ貴族として一生を終えた。ナポレオンという名は2月革命を経ても尚、

その多様性ゆえに有効である。後継者として2世は存在感を高めることで成功した。

ナポレオンの権力が全盛期である時に皇子であるルイ・ナポレオンは生まれた。後にナポレオン3世になる人物である。ルイは幼少期から厳格な教育を受けており、知識人も称賛するほど成績が優秀であった。1830年代になるとナショナリズム運動が活発化し、そのような革命運動に参加をするようになった。また、ルイは、サン・シモン主義に接近し、統治期に新しい経済政策や工業発展がみられた。二度のクーデタ未遂をは、以上にみた信念に発する行動であり、相容れない現行体制に対する批判になったのである。大統領選挙に立候補したルイは、6月事件を鎮圧したカヴェニャクをはじめとする手ごわい対抗馬らと競っていた。農村票を大いに期待にした結果圧勝した。帝国復活するにあたり人民投票を行った結果、圧倒的多数の賛成により帝政が樹立されたのは、その約二か月後の事であった。そしてルイはナポレオン帝国として誇示し、「ナポレオン3世」として継承していった。ローマ帝国復活の背景にはナポレオン3世がカトリック教会と関係を築き、協力関係にいた。帝政の栄光を求めるナポレオン3世は、軍事・外交とは異なる分野でもフランスの威信を対外的に知らしめることに腐心した。産業革命に続いてフランスではパリ都市改造が行われた。ナポレオン3世の理想には、国民主義の原則にたちつつ、古いヨーロッパ（ウィーン体制）を打破するという目標があった。達成するためにエルサレム聖地管理権を要求して開戦した。独立運動など様々な経緯により、フランスはヨーロッパ国際政治の中心的な役割を担うことになる。国内でも親イタリア政策のような取り組みが度々反発があったが、イタリア統一に少なからず寄与し、ナショナリズムの旗頭として存在感も増すことになった。ナポレオン三世の治世は、全世界が大きく変化を遂げていく時代にあって、「フランスの栄光」を求めて苦闘する時期でもあった。時には邪悪な独裁者として描かれた場面もあったが実績が広く認められ、国民的支持を集めていた。彼はナポレオンの名を代表する者となった。

1856年ルイ皇太子が誕生した。両親や周りから大ナポレオンの継承者と期待され、生まれて間もない時から軍隊に入り、勉学に励んでいた。しかし彼は、父の気配など気にせず有頂天になっていた。敵の進軍から逃れるために、イギリスへと脱出した。父が亡命後、一時期衝撃を受けより一層勉学に励んでいた。軍人として働くことを望んでいて、状況の一新がしたく、オーストラリア軍に入ることも考えていた。しかしアフリカへの行く途中、ズールー族に殺害された。第二帝政崩壊後、亡命したルイ皇太子は、成長とともに、ナポレオンの名に恥じないようにボナパルト派首領としての自覚を深めていった。ナポレオン皇朝の創設者に憧れ軍人になり、イギリス軍人として努める時期もあった。23歳という若さで死亡したが、歴代のナポレオンと同じ運命を過ごすことになったのである。

その後、ボナパルト家当主の後継者はジェロム皇統になった。それでも後継者をめぐる内紛は、政治活動にも大きな影響を与えてた。いずれにせよ、ナポレオンの名がフランス史の表舞台で大きな役割を演じたのは大革命から二月革命に至る政治的・社会的な激動期があった。革命はフランス国内に大きな影響を与えただけでなく、フランスが発信した大革命の波は広くヨーロッパにインパクトを残した。それがナポレオン時代である。